

【重陽】 ちようやう

人日[じんじつ 1/1 後に 1/7] ・上巳[じやうし 3/3] ・端午[だんご 5/5] ・七夕[たなばた 7/7] ・重陽[ちようやう 9/9]を五節句とといいます。中国より伝わった暦に基づきます。陽の数(奇数)が重なった日であるところから吉日とされ、各種行事がおこなわれてきました。人日は永久を祈り、上巳は病の退散を祈り桃花を供え、端午は害虫悪鬼の退散を祈り菖蒲を供え、七夕は餓鬼祓に麦餅を供え、重陽は延年の願いに菊を供えました。

重陽の別名である重九が長久に通じることから延年を願う節句となったという説があります。菊が強く重陽節と結びつくのは季節が重なるというだけではなく、菊は長寿をもたらすと信じられていたからでしょう。中国各地の不老長寿の河、菊水伝説がその始まりと思われまます。

六世紀の年中行事を記した中国最古の歳時記『荆楚歳時記』にすら「未だ何れの代より起こるかを知らず」とあり、その起源は古くまで遡れそうです。漢代まで遡れるのではという専門家もいます。

『荆楚歳時記』によれば、当時中国でも大切な行事であつたらしく、「茱萸を佩び、餌を食い、菊花の酒を飲まば、人をして長寿ならしむと云う」とあります。茱萸(シュユ=山椒の一種)には魔よけの意味があつたようです。

また「山に登り菊花の酒を飲まば…」ともあり、茶菓、菊酒を携え、山や丘など高いところで宴会を催したようです。

重陽の宴の詩は菊好きで知られる陶淵明をはじめ数多く、唐詩にもこの様を詠んだものがたくさんあります。

・九月九日 山東の兄弟を憶ふ 王維
独り異郷に在りて異客と為り 佳節に逢ふ毎に倍ます親を思ふ
遙かに知る兄弟高きに登る処 遍く茱萸を挿して一人を少くを

五節句は当初日本では宮中年中行事として受け入れられました。時代が下るにつれて中国式暦とともに庶民にも広まり地方色のある節句となったようです。

『日本書紀』天武十四年九月九日に「天皇旧宮の安殿の庭に宴す」とある宴が日本における重陽の初見でしょう。

日本最古の漢詩集『懐風藻』には「菊酒」の語が散見しますが、『万葉集』には菊すら見当たりません。これは重陽節も菊も奈良時代には既にもたらされていたものの、宮中の行事に止まり、未だ広く人々の生活に根付いていなかったことを物語っています。

平安時代には着綿[きせわた]と称して、重陽節前日の夜から菊の花に綿をかぶせて露を含ませ、

朝その綿で顔や体を洗う風習が宮中の女性たちに流行りました。これは老いが拭き取れ美貌が保てるという当時流行の美容術です。『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』『宇津保物語』にも見られる風習です。

茶の湯の世界でも着綿は干菓子在意匠などによく見かけますね。

・九月九日は暁方より雨すこし降りて、菊の露もこちたく、覆ひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされて。つとめてはやみにたれど、なほ曇りて、ややもせば降りおちぬべく見えたるもをかし。
『枕草子』八より

重陽を趣向とした茶会には菊の意匠の道具がふさわしいですが、菊文様の道具は薄茶器・水指・釜・香合・炭斗まで数限りなくあり、多くを取り揃え過ぎるとくどくなってしまいます。重陽に関連する銘には・菊の宴・着せ綿・仙花・九華・菊重・白菊・菊酒・登高・茱萸・長寿・延命・不老などが思い浮かびますが、銘も近すぎると説明的になってしまう危険があります。その加減が亭主の力量なのでしょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~